様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０４９１

研究課題名（和文）戦前期の「口演童話」活動にみる地域児童文化運動の社会教育的意義について

研究課題名（英文）Adult and Community educational significance of children's cultural movement before World War II: A Case Study of "Narrative of fairy tale"

研究代表者
松山　鮎子（Matsuyama, Ayuko）

東京大学・教育学研究科（研究院）・助教

研究者番号：７０６０８８３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：文字に書かれた物語を覚えて語る口演童話の特徴の一つは、古くから共同体で語られてきた昔話を新たに「国民童話」に書き直した点で、それは近代以前の昔話を、子ども－家庭－国家という結びつきの下に再現する役割を果たした。
　この口演童話が学校へ普及すると、娯楽的要素を残しながらも、教育意図の達成が語りの表現、内容ともに重視されるようになった。
　ただその核心は、おはなしの場において教育者が子どもと目の交流を行うことにあった。声を媒介とした相互行為という語りの性質は、文字の物語の変容可能性を促すことにより、戦前の教育を規定する指導する者・される者という二項対立では解消しきれない豊かな学びのあり方を示していた。

研究成果の概要（英文）：One of the features of the narrated fairy tale is that a rewrite of the old story that has been handed down in the community for a long time, in a new "national fairy tale." Thereby, pre-modern folk tale has been reproduced by the ties of "child - state - home". When the narrated fairy tale is to spread to the school, in the expression and content of the talks, performers began to focus on the achievement of education intended not only entertaining element.
　However, the heart of the narrated fairy tale, the educator was to carry out the exchange of the child and the eye in the place of the story. The nature of the narrative of mutual act that was mediated voice, by promoting the transformation potential of the story that was written, explained by the dichotomy of "guidance to the person and guidance to be a person" to define the pre-war Japanese education It shows a rich learning way that can not be.

研究分野：教育学

キーワード：語り　近代教育　口演童話

１．研究開始当初の背景

昔話の「語り」は、農山漁村などかつての村落共同体において、共同体の活性化や伝統的秩序の維持のために伝えられてきた物語である。こうした共同体を基盤とする家々でおこなわれてきた「語り」に対して、明治期以降に発展した大人が子どもにおこなう「語り」は児童文化運動の一環と捉えられ、とくに大正期から昭和初期までは、児童文学作家らの創作した童話を主な題材とした。また、それは絵本や児童書が全国に行き渡るようになった昭和 40 年代頃まで、地域ごとに特色ある文化活動として広範におこなわれていた。

「口演童話」と呼ばれるこの活動は、現在、図書館や小学校などで実施される「おはなし会」の萌芽であり、明治末期に児童文学作家の巌谷小波や久留島武彦、幼児教育家の岸辺福雄らが普及させ、大正期から昭和初期にかけ発展した。とくに、巌谷小波と久留島武彦は全国各地へ口演に赴き、地方の児童文学作家や教師らによる活動に大きな影響を与えた人物である。

しかし、一時期は全国で活況を呈した取り組みにもかかわらず、同時代に盛り上がりをみせた生活綴方が、優れた教育活動、あるいは初期の児童文化運動の事例として多く取り上げられるのに対して、口演童話の実態や地域の児童文化史における意義づけはこれまで十分に研究されてこなかった。

先行研究によれば、口演童話の発達は以下の 5 期に分類される。1）明治 30 年～大正 8 年「お伽噺時代（誕生期）」２）大正 9 年～昭和 5 年「開花期（童話時代前期）」３）昭和 6 年～11 年「爛熟期（童話時代後期）」４）昭和 12 年～昭和 20 年「戦時期（統制時代）」５）昭和 20 年～「変動期（テレビ出現後）」（内山憲尚「口演童話」滑川道夫・菅忠道編『近代日本の児童文化』新評論、1972）。上記をふまえると、口演童話の先行研究は、誕生期から童話時代後期までを主な大正としており、内容面では次の二つが中心である。第一は、口演童話家の方法論や教育思想の研究（是澤優子「子どもに語る「お話」の方法論に関する研究：岸辺福雄の口演理論」『東京家政大学研究紀要』東京家政大学、2008 など）、第二が、特定の地域における活動の歴史的な研究である（磯部孝子「名古屋と周辺地域の口演童話活動–明治末から昭和前期まで」『文化科学研究 4（2）』中京大学、1993、大竹聖美「挑戦・満州巡回口演童話会–児童文学者の植民地訪問」『東京純心女子大学紀要（9）』東京純心女子大学、2005 など）。

しかし、これまでの先行研究では、戦前期の口演童話の全体を把握する試みがなされておらず、その歴史的意義は十分に検討されていると言い難い。そこで、本研究では明治期から昭和初期にかけて、口演童話の普及の立役者である巌谷小波と久留島武彦の活動実績を追うことで、その広まりの範囲と各地に与えた影響について明らかにすることとする。

他方、大正期の口演童話の題材は、以下の三つに分類される。1）口演童話家の語る「お伽噺（童話）」２）仏教やキリスト教の宗教者が語る「説話」３）教師が語る「教室童話」（有働玲子「大正期の口演童話–下位春吉・水田光を中心にして–」『研究紀要第 2 分冊・短期大学部（Ｉ）25』盛徳大学、1992）。

上記のうち、教室童話についての先行研究によれば、師範学校の学生たちによる口演童話の取り組みは、単なるクラブ活動には留まらず、地域の「社会教育活動」としての性格をもっていたことが指摘されている（島田剛士「教育的文化活動に関する歴史的考察–口演童話を中心として」『教育デザイン研究（3）』横浜国立大学、2012）。ただし、ここでは、それがどのように各地域の文化や生活と関わりながら展開されていたのか十分に検討されておらず、口演童話の社会教育的意義ならびに、地域における児童文化運動としての性格は不透明なままである。

だが、地方の口演では、都会から口演童話家が訪れるため近隣の小学校などが合同し村をあげての行事として歓迎された点、また、「口演」という特徴を活かし、雑誌などの十分に普及していなかった地方で、地元の教師らによる口演童話組織が発足した点から、それが学校外の子どもの生活や娯楽にまで影響を与えたことがうかがい知れる。

そこで本研究は、特定地域の口演童話の実態を描き出し、それが戦前の地域児童文化運動の一つとして果たした役割を検討することとする。

２．研究の目的

本研究は、戦前期に隆盛した子どもの学校外教育の取り組みの一つである口演童話について、これまで先行研究では明らかにされてこなかった活動の全体像をふまえた上で、各地域における個別の実践の調査分析をおこない、それが学校の一行事にとどまらず地域で展開されていたゆえに見出だせる、社会教育的意義について検討する。そしてこれにより、戦前の地域児童文化運動の様相の一端を明らかにすることが目的である。

具体的な研究課題として、１）口演童話を全国へ普及した巌谷小波と久留島武彦の活動実績を追うことで、口演童話の普及の過程と影響を明らかにする。

次に、２）特定の地域を選定し、より詳細な活動の展開と実態を明らかにする。それによって、口演童話が戦前期の児童文化運動の中でどのような位置づけにあったのかについて考察することとする。

３．研究の方法

初年度は、研究課題である口演童話を全国へ普及した巌谷小波と久留島武彦の活動実績を追うことで、その広がりと影響を明らか

にするため、巌谷と久留島それぞれの著作等の一次資料をもとに、両者の実践の内容、さらに、活動の動機、および教育思想を分析し、人物の全体像をふまえた考察をおこなった。

次年度は、前年度に得られた研究成果を基に、大正期から昭和初期にかけて口演童話を地方の教師らに広めた松美佐雄の口演童話の実践、および、戦後、山形県の地域児童文化運動に大きな影響を与えた須藤克三の童話による教育実践に焦点を当てた。資料として、前者においては、松美の主催した「日本口演童話連盟」の機関誌と彼の著作を一次資料として主な分析の対象とした。また、後者においては、当時の新聞や教育雑誌など一次資料の他、須藤の童話作品や回想記などの 2 次資料を用い、さらに山形県内の関係者へのインタビュー調査によって分析を進めた。

最終年度は、前年度までの課題について追加調査を実施しながら、得られた成果を基に論文を執筆し、研究の終了に向けて最終的なまとめをおこなった。

４．研究成果

本研究で得られた成果は、以下の 4 点である。

（１）口演童話の草創期について振り返ってみると、口演童話の創始者は、お伽話の創作をきっかけに日本初の児童文学者となった巌谷小波であった。小学校や劇場などさまざまな場で子どもへのお伽話の口演を開催した巌谷は、その過程で、家庭における教育とお伽話の重要性に対する認識を深めていった。彼の家庭観および子ども観は、この時代に新たに生じてきた子どもと家庭についての考え方と重なり合っていた。すなわちそれは、家庭は「愛と信頼」に基づく親子の繋がりの中で形成され、そこで子どもは、両親から一心に愛情を受け、教育される存在であるというものだ。そして、そのような家庭と子どもの関係性の根本にあるのが、国家であった。

巌谷は、日本がヨーロッパやアメリカなどの列強国と肩を並べ渡り歩いていける国力を身につけることを目指し、その実現のため、進取の精神に基づく「意志の力」を養う国民教育が必要であると提唱した。つまり、そのような意味での国家を将来的に背負っていくのが、家庭において教育された子どもたちなのである。巌谷のお伽話の創作の根本にあるのは、こうした国家と教育の関係性についての考え方であった。

さらに、巌谷のお伽噺の特徴として挙げられるのは、それが古くから語られてきた昔話を新たに書き直した「国民童話」であるという点だった。先述のように、近代以前の昔話は、「聖なるもの」に規定され、共同体の秩序構造を維持するものであった。その「聖なるもの」が権威を減衰させていく過程で、その空白を引き受けるように、家庭における子どもが「聖なるもの」を内在する存在として発見されたのだった。そして、巌谷が創作した固有の「国民性」をもつお伽噺の、その主たる受け手が、子どもだったのである。

つまりここでは、近代以前の昔話の果たしてきた機能が、子ども−家庭−国家という結びつきのもとに再現されていたのである。その意味で、お伽噺は、聖なる子どもたちを「国家」という共同体の枠組みに従属させていく、ある種の役割を果たしていたのだといえる。

ただここで指摘しておきたいのは、巌谷が、当時の学校教育を批判的な立場でとらえ、子どもたちに必要なのは、彼らの特性に合った想像力豊かな空想的お伽噺だと考えていた。ここに、お伽噺を同時代の玩具や絵本などと同様に、ある種の子どもの「遊び」ととらえる発想が見出せる。つまり、巌谷は、お伽噺の子どもの創造性、個性を伸ばすという効果にも期待を寄せていたのである。こうしたお伽噺に対する考え方は、やがて大正期以降に生まれてくる「童話」に期待された教育性とも通じるものであろう。

（２）次に、同じく口演童話の草創期において、久留島武彦と岸辺福雄は、それぞれに異なる童話観をもちながら、同時代の口演童話活動の広まりに大きく貢献した人物であった。まず、お伽噺の口演は、劇場や公会堂のような「新しい時代」を顕現する場において、おもに語られ演じられるものだった。

そしてその題材は、巌谷をはじめとする童話家たちが生みだした、新時代の「昔話」であった。それが、久留島武彦の雄弁的な語り口によって「聴衆」としての子どもたちに伝えられたのである。このように、発展期の口演童話は、都市の新中間層家庭の新たな生活スタイルの形成、消費資本主義の勃興という転換期の社会状況と結びつくことで「大衆性」を強めていった。

ただ、同じく口演童話家として著名であった岸辺の語り口は、寄席や講談、歌舞伎といった「語りもの」の伝統がその参考となっていた。そして彼は、一人ひとりの子どもに語りかけるように話すことによって、童話の「教育性」を高めようとした。こうした久留島と岸辺の語り口のスタイルの違いは、「大衆性」と「教育性」という、当時の口演童話の二つの方向性を映し出すものだったといえる。

さらに、大正期、口演童話が学校に普及するようになると、子どもに「道徳心」や「愛国心」を養わせるという教育意図の達成が、語りの表現、童話の内容ともに重視されるようになる。口演技術には、久留島の話術の影響が反映され、その意味で、童話を語ることは教師の「精神修養」につうじるものと考えられるようになっていた。だが、学校教育におけるこうした語りの性質が、昭和初期になると変化の兆しを見せる。すなわち、自由主義教育の思想の浸透とともに、そこに岸辺の語り口に見られるような、子ども一人ひとりに語るという姿勢が現れ始めたのである。

その頃になると、口演童話を学ぶことが、語りのスタイルを身につけるというより、教師が子どもとの関係性の中で自分自身の教育方法をとらえ返し、自己認識そのものを変化させることに役立つものになっていた。ここに、都市における大衆文化とともに生まれた口演童話が、その「大衆性」から脱却し、子ども一人ひとりとの関係を重視した童話の教育へと移っていく、変化点が見出せた。またさらに、ここでは童話の語りにおいて、お話を聴く子どもたちが、能動的に聴くことから、語ることの能動性へと変化していくことが明らかになった。

（3）昭和初期になると、口演童話は各地域の小学校や師範学校教師らの活動を中心に、いよいよ最盛期を迎えることとなった。

この頃の口演童話の有り様を、松美佐雄の「動的」概念を手がかりに追ったところ、松美は、童話による教育を「知識」の享受による情操の発達と、子どもの幸福感という二方向から意義あるものとしていた。また、それには子どもが物語の「観念」を実生活に生かすという観点と、学習する教師自身が考え創意工夫するという観点で、子どもの「実行性」を養う意図が含まれていた。つまり、子どもの「実効性」を養うということに、活動の「動的」性格の意味が込められたのであった。このように、昭和初期の童話には、子どもが情操を発達させ、それにより実行力を養うことで幸福になっていくというストーリーが込められたのである。

さらに、童話における「動的」概念の核心は、お話の場における「眼の交流」をつうじ、教師が目の前にいる児童を多であり個でもある「子ども」として認識することだった。ここには、オングの指摘した声としてのことばの一回性、身体性という性質がよくあらわれている。つまり、教師が一般化されてしまうことのない子ども一人ひとりの個別性を発見できたのは、「口演」が朗読とは異なり、子どもとの相互行為によって成立する場だったからだといえる。そして、そうした関係性が子どもとの信頼を育み、教師の自信となったことが、活動そのものの質をいっそう高めていこうとする意欲に結びついていた。

なお、ちょうど 1920 年代は、大戦後の産業資本主義の発展とともない、都市部を中心に新中間層という新たな社会階層が誕生した時代であった。日本においては、この新中間層の形成が、P.アリエスが指摘したような近代における実質的な「子ども」の誕生のきっかけとなっていた。そして、この子どもそれ自体がもつ価値である「童心」の発見が、大正期以降、児童文化運動や児童中心主義の教育を発展させていった。こうした時代状況において、松美の目指した童話による教育も、やはり新教育の児童観と親和的であり、国民国家の形成という学校教育の目標とも重なり合ったものだった。

だがそれは、たとえば少年団のように規律訓練による身体の統制を重視した活動とは異なっていた。なぜならお話は、「語りつつ聴き聴きつつ語る」というように、教育者と子どもが上下関係ではなく、「信頼」によって結びつくことで「動的」に展開するものだからである。またその核心は、そうした両者の相互関係において、教育者が子どもへのまなざしを変化させ、その異文化性をとらえられるようになる点にあった。それがひいては、新たな社会の形成者として彼らを育成する、そのような意味で子どもを成長発達する存在としてとらえる観点へと結びつく可能性を秘めたものだったことが、ここで明らかになった。

（4）さらに、戦後、山形県の教育・文化運動の中心を担った須藤克三は、幼少期、一方で父の影響の下、内面のリアリズムや文学の娯楽性を追求した近代の文学作品に多くふれる読書経験を積んできた。他方で、祖母によって伝統的な昔話の世界にも浸ってきた。このように、共同体を志向する近代以前の世界観と、個人を志向する近代のそれと、二つのものの見方を同時に経験したところに、彼の家庭環境の特徴があった。そして、彼にとって子どもの頃に小学校で口演童話を聴いたことは、語ることの楽しみを知り、童話創作の源となる想像力を得るほどの印象的な経験であった。「語ること」の教育には、そうした子どもの成長発達の飛躍が、子どもと教育者との相互的な関係性によってなされる点に特徴があった。

また、須藤が教師として成長していく過程は、浪漫主義的な子ども観の広がりとその行き詰まり、それによる子どもの「生活」の発見という、自由主義教育の深化の方向性に一致していた。ゆえに、彼の活動からは、この時代の教師が子どもと接する中でどのような悩みを抱え、自身の実践を深めていったのか、その姿が浮かび上がってきた。須藤にとって童話の創作は、未知の存在である子どもたちへ感情移入し、その心に寄り添うことで具体的な地域環境に生きる「ありのまま」の子どもの姿を認識するための方法だった。

そして、「語ること」の活動の意義は、童話を語ることで目の前の子どもたちに喜びを与え、さらに「現象面」から彼らの現実の姿を認識する点にあった。そのような関係性において、子どもがやがて大人を乗り越えていく存在として成長発達することで、「自由」で「公正」な社会へと現実を組み替えていこうとした点に、須藤の「語ること」の活動の特徴が見出せた。

ここまで述べてきた本研究の結果をふまえて、口演童話の意義についてまとめる。ここで重要な点は、近代以降の口演童話が、文字のテキストを台本にするという性質をもっていたことである。これが、口伝えの昔話とは大きく異なる点であった。ここでは、その意味を考えてみたい。

近代以前の共同体の秩序の衰退は、人間と自然とのつながりを弱め、個人が共同体集団から「自立」することを押し進めていった。それによって個人が得た近代の精神的な所産は、三点あるといわれている[1]。それは第一が、自然を一つの機械のようにみる科学的思考様式、第二が、基本的人権理論の基礎をなす、かけがえのない個という感覚、第三が、膨張する社会的生産力によって更新される知識と技術を支えにもつ進歩の観念である。これら三つが互いに結び合い、反発し合う中で、近代の子ども観は形成されてきた。

他方、V.アンダーソンは、『想像の共同体』の中で、共同体はその真偽によってではなく、それが想像されるスタイルによって区別されるものであると述べている[2]。そして中でも、近代国家は、資本主義の発展と結びつきながら、均質で固定化した時間と空間の観念を人々の意識の中に育み、個人の内に国家を内面化させていったと指摘する。そして、その原動力となったのが、文字化され、固定化された知識としての書物や新聞を読むことであった。また、近代以降の学校を中心とした教育は、こうして均質化、標準化された知識を子どもが内面化し、国家的なものに同調していくための装置として、一つの役割を果たしていたといえよう。

このような歴史の流れをふまえると、口演童話は、すべての子どもたちのために「文化」をという「平等」の観念の下、上記のような意味での教育活動として、地域において学校教育の補足的役割を担っていたといえる。とくに、昭和初期、地元の小学校教師らがその担い手の中心となることで、単なる「娯楽」ではなく童話に「教育性」を、という意識がますます強められていった。

ただ同時に、口演童話の「声」を媒介とした子どもと教育者の相互行為という性質に着目すると、別のとらえ方もできる。つまり、童話を語るということは、教育者と子どもが上下関係ではなく信頼によって結びつくことで、両者の相互関係において、展開されるものだったからである。

このように、教育者と子どもの関係性の視点によって捉え返してみると、「指導」か「自発性」か、という戦前の学校外教育実践、および児童文化活動を規定する二項対立では解消しきれない、より複雑で豊かな「学び」のあり方を導き出せると考えられる。

〈引用文献〉

1.宮澤康人「近代社会の子ども観」、『子どもの発達と教育：子ども観と発達思想の展開』第2巻、岩波書店、1979年、168頁
2.V.アンダーソン『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、リブロポート、1992年、17-18頁

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①松山鮎子、戦前期における教師の子どもへのまなざしの変化について：須藤克三の「語ること」の教育実践を事例として、早稲田教育評論、査読あり、第30巻第1号、2016年、109−134頁

②松山鮎子、昭和初期の口演童話活動に於ける教育者と子どもの関係について：松美佐雄の「動的」概念を手がかりに、日本学習社会学会創立 10 週年記念出版、査読あり、2016年9月刊行予定、頁数未定

〔学会発表〕（計2件）

①
・発表者名：松山鮎子
・発表標題：「大正期の児童文化運動の学校外教育的側面について−『話方研究』にみる口演童話活動に着目して−」
・学会名：日本社会教育学会
・発表年月日：2013年9月28日
・発表場所：東京学芸大学

②
・発表者名：松山鮎子
・発表標題：「昭和期の児童文化運動の〈地域性〉に関する一考察−口演童話活動を事例として−」
・学会名：日本学習社会学会
・発表年月日：2014年9月7日
・発表場所：早稲田大学

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
　松山　鮎子（Matsuyama, Ayuko）

　研究機関名・部局名・職名：東京大学・教育学研究科・助教
研究者番号：70608835

(2)研究分担者
（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

　研究者番号：